

如_レ日月ノ光明ノ
能_ク除_ニ諸ノ幽冥_一ヲ
斯_レ人行_ニ世間_一ニ
能_ク滅_ニ衆生ノ闇_一ヲ
聖主天中ノ天
伽陵頻伽ノ聲_ニテ
哀_レ愍_ニ衆生_一者
我等今敬禮_ス

御製

あさみどりすみわたりにたる大空の
ひろきをおのがこゝろともかな

日蓮上人之像

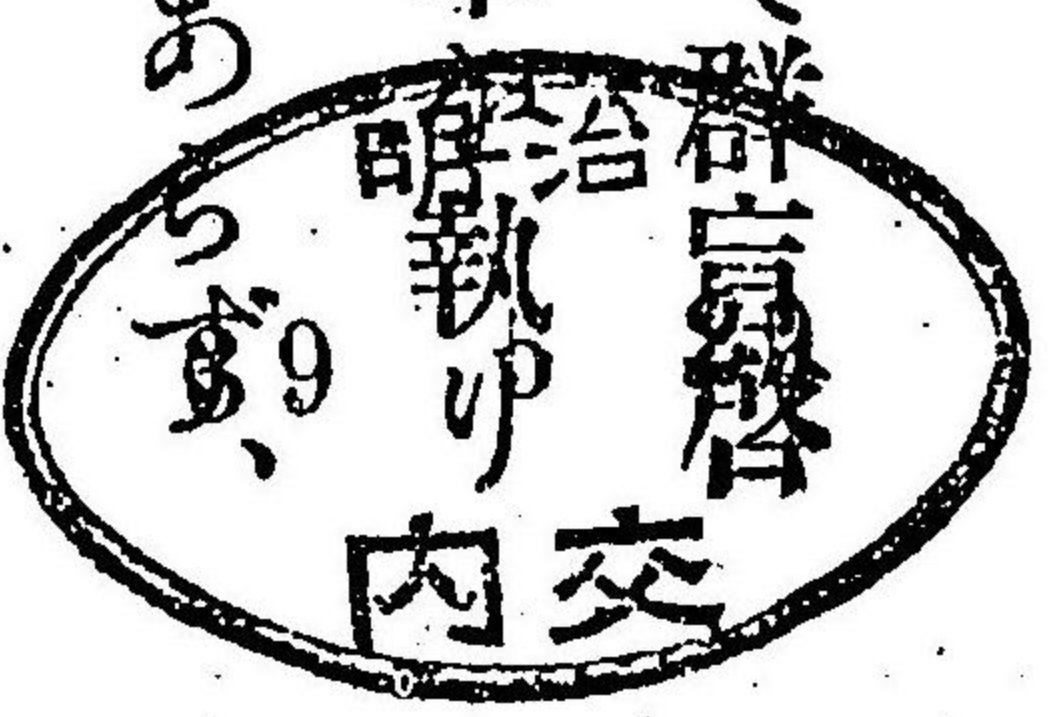


○八皇八十六代後堀河天皇の貞應元年二月十六日、安房國長狹郡小湊の庄に御降誕、是れ吾國紀元一千八百八十二年にして、佛滅後二千一百七十一年、末法に入りて百七十一年目也、瑞氣室に充ち、清泉庭に湧き、蓮華海濱に生ず。○建長五年三十二歳三月伊勢大廟に建宗を奏上し四月廿八日故國清澄山旭の森に於て旭日に向て始めて妙法を唱へ出す。○文應元年七月十六日、「立正安國論」を執權時頼に致す三諫の第一なり。○弘長元年五月十二日。伊豆の伊東へ流罪せらる。○文永元年十一月十一日小松原法難御負傷。○八年九月十二日龍口御法難馬上諫言、是れ三諫の第二なり。○十月十日佐渡御流罪。○十一年三月赦に遇て鎌倉に還る、四月八日柳營に於て、大老平頼綱に面し大諫、これ三諫の第三なり。○此年五月遂に身延に隠れたまふ、爾來九年間講經論議著作結撰に従ふ、○弘安五年六十一歳九月微恙あり九年の舊棲を出で、武州池上に到り十月十三日涅槃に入る。

天來の聲はし書

特21
231

聖祖日蓮聖人の文章は其性靈の秘奥を直寫し來て群盲啓道の清訓と爲りしもの、世の拘々として机上に筆^合執り^合字を練り句を練ひ、彫琢を以て成りし凡庸の作にあらず、實に自然の文字にして其間自ら妙調を備へ、神韻の朗々



として盡きざるものあり、之を讀み之を誦すれば三歎節を打て卓上卷を掩ふこと能はず、其文固と身親しく其血と其骨とを碎て以て之を體し給ひし實歷にして其沈痛の言悲愴の句の如き怨嫉の峰起如何に重大なりしかを想ひ

起さしめ、亦た其叱咤拆伏の峻烈なる文字に至ては匹夫も廉に臆夫も奮起せしむるものあり、就中其開目抄の一滴をなめ大海の潮を知る等の言は千丈の瀑布の天空より落下し來て怒沫狂濤迅雷風發慄然寒毛を生ずる如きものあり、又翻て子を失ひし慈母を慰め夫を失ひし寡婦に同情を寄せ給ひし章に至ては情緒纏綿として盡きず如何に慈悲の深く且つ厚きかを偲ふべし、殊に其一度大獅子吼せらるる時は乾坤を吞吐して滔々大河の流るゝが如く百千萬言一氣呵成して煩腦の薪を燒きて一塵をも止めざる

の慨あり、故高山博士の絶代の妙文なりと歎ぜるもの知言と謂ふべし、予の嘗て常に好める文字を擇びて一處に編し日常拜誦の便に供したるものありき、今年故高山博士の全集を讀みて其中世人の聖祖の文章を知らざる多きを嗟嘆せられたる言ありき、是に於て遂に意を決して別本に之を制し世の未だ聖人の文章に接せざる人の爲に其一二予の好める處のものを頒ちて廣く學生並に宗徒の全集の聖教を讀む能はざる人の爲にせんを欲し乃ち天來の聲と名して印刷に付することにせり、之を見んもの之に

依て若し日蓮聖人の文章を知るの楷梯たるを得ば我願即ち足れり

一文末の頁數は加藤文雅師の編せられたる遺文録の出處を示すなり

一(一)欄の文字は予の初心の爲の注意或は字の意義を示すなり

一卷點は予の自ら快と呼び或は感を深ふするものに付したり

一龍頭には其抄の題號と並に注意を施したり

予は他日義類を編して一書とせんと欲するも此書は専ら文章の平易なるもののみを取り理義の深遠なるものは之を避けたり、蓋し學生の爲に聖人の文章を讀ましめんと目的にして聖人の宗學を紹介するにあらず故に其撰自ら別の旨あり

一若し聖人の書を研究せんとする人あらば予は其本書は加藤文雅上人編纂の遺文録と而して研究方法としては田中智學居士の妙宗式目講義録を紹介せんとす。蓋し當代

に於て通俗的に本化高妙の學を解説するも亦た此右に出づものなきを思へばなり、

他に清水梁山上人の宗乘講義録あれども此は恐らくは専門學者のものならん歟

明治二十八年十一月十一日

宮城縣白石の僑居にて

平井學俊

誌

三 大 誓 願

我れ日本の柱とならん……………勇

我れ日本の眼目とならん……………智

我れ日本の大船とならん……………仁

(附 目 抄)

前 録

予は本書を閲讀せむ諸君爲に豫め故高山博士の言を紹介せん。予は博士は世人目して日蓮狂と云ひし程に聖人を信仰せられたり而して其聖人を信仰せらるゝや直に自己を没却して日蓮其人の自覺と信仰とに同如するを以て自己の信仰させらるゝものにして他人の自他を隔てゝ以て其他を仰崇したるもの比にあらず故に其況後録の文章は實に自己の信仰を日蓮聖人に寄せて以て表白せられたるものにして予は常に愛誦して止ざるなり其録に云く

嗚呼彼れは遂に目覺めたり永遠に目覺たり 二十年來の疑惑は霧の如く散したり 法華經の預言は是の覺醒によりて更に新しき生命を得ぬ

此言の説明
は上人の開
目抄の一部
に在り就て
見よ

東海、の佛子、日蓮の生涯は、俄に寂光寶土の光明に照されて、直に佛識の現證となりぬ。彼れが過去は久遠の過去となりぬ。彼れの未來も久遠の未來となりぬ。彼れが接觸したる一切の衆生と國土と凡て彼れの一身に關聯して妙經預言の註脚となりぬ。彌勒天臺妙樂傳教等は彼れによりて初めて妄語の罪を免れたるのみならず、一代佛教の歸着は彼れによりて初めて現前の事證となりぬ。是の大自覺の喚起せられたる時鎌倉の流人安房東條の旃陀羅の子日蓮は一躍して本化地涌の上首上行菩薩となりぬ。彼れは如何にして是の自覺に到達したりしや。吾人は法華經勸持品の所謂二十行の偈が是の自覺を彼の心中に喚起したる重なる媒介者なることを疑はず。何となれば、未法の大導師の一身上の經歷に關する預言は殆ど是の一偈の中に包括せらるれば也。されば日蓮にして自家二十年の境遇が歷々として是の預言の現證なることを認識したる時、豁然として自ら省悟する所あるは蓋し自然の事なるべし。偈の文

俗衆増上慢

道門増上慢

僭聖増上慢

に曰く

諸々の無智の人、惡口罵詈等及び刀杖を加ふる者あらば』我等皆當に忍ぶべし』惡世中の比丘邪智にして心詭曲なり。未だ得ざるを既に得たりと謂ひ我慢の心充滿せむ』或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞道を行へりと謂ひて法華經を弘むる者を輕賤する者あらむ、彼れ利養に貪著するが故に法を説き世間無智の人に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならむ、是の人惡心を懷き常に世俗の事を念ふ。唯名を阿練若に假るのみ、好むで我等法華經を弘むる者の過を出し而して言はむ、此の諸々の比丘等は利養を貪る爲の故に外道の論議を説き自ら此經典を作て世間の人と誑惑し名聞を求むる爲の故に是經を分別すと、彼等常に大衆の中に在りて我等法華經を弘むるものを毀らむと欲するの故に國王大臣婆羅門居士及び餘の比丘衆に向ひ誹謗して我が惡説いて謂はむ是れ邪見の人にして外道の譏

を説くのみと』我等佛を敬するの故に悉く是の諸惡を忍ぶべし、濁
劫惡世の中には多く諸々の恐怖あり惡鬼其身に入りて我を罵詈し毀
辱せむ、我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を著け是經を説く爲の故に
此の諸々の難事を忍ぶべし、我は身命を愛まず但無上道を惜む、我
等來世に於て佛の所囑を護持せむ、世尊自ら當に知り給ふべし、濁
世の惡此丘、佛の方便して宜しきに隨つて説く所の法を知らず、惡
口して嘔噎し數々擯出せられて塔寺を遠離せむ、是の如き衆惡をも
佛の告敕を念ふれ故に皆當に是の事を忍ぶべし、(文意不通の處に
は假りに釋字を添加す)

是の偈に所謂る罵詈ば言ふまでも無し 刀杖を加ふる者とは即ち東條
景信等の一輩に非ずや惡世の比丘邪智にして増上慢なるものは當時の
十宗の僧侶に非ずや 阿練若(寺院)に在りて白衣無知の人に恭敬せら
るゝこと阿羅漢の如く名利に貪著して法華經の行者を誹謗するものは

即ち良觀行敏道隆隆觀等の當時の所謂る諸高僧に非ずや 國王大臣に
向つて我を譏毀するものは即ち持齋念佛眞言師等が北條氏に噉訴せ
るの謂に非ずや 身命を愛まずして但無上道を惜み是等一切の諸惡を
忍受して佛の村屬を護持せるものは即ち日蓮に非ずして誰ぞ 所謂る
數々擯出せられて塔寺を遠離せむと謂へるものは即ち居處を追はるゝ
こと二十餘度一度びは伊豆に放たれ二度びは佐渡に流されたる日蓮其
人の現境に非ずして何ぞや 日蓮は法華經の行者也時は未法の初めに
當り國は東方の惡土に合し而して現身を以て勸持品二十行の預言を實
現す 是の如きは南岳天臺妙樂傳教等の尚ほ遙に及び到らざる所本化
の上行菩薩に非ざるよりは誰れか能く佛識を顯證して此の如く的確な
るを得むや、佛にして妄語の神ならむか即ち已む、苟も久遠實成の三
界の教主ならば日蓮亦必ず上行菩薩ならざるべからず 日蓮は疑もな
く是の如く思惟し是の如く確信しだりし也

(右樗牛全集の四卷の一節)

こ論断して滔々數萬字予は聖祖の開目抄を併せ讀んで心
靈の慰藉こそ願くは斯る文章は座右の銘として朝暮誦記
するの利なるを覺へ此に全集中の一節を紹介するなり苟
も人にして日蓮の自覺を自覺として熱烈故博士の如く
にして始て心靈の光明を得永遠不死の生命を保たん歟

天來の聲目錄

正編 上

東海の好瑞	……………	一頁
怨嫉の狂態	……………	十八頁
伊豆の荒波	……………	二十二頁
松間の電影	……………	二十五頁
沙上の流血	……………	二十七頁
配所の積雪	……………	三十一頁

延嶺の眞月……………三十六頁

正編 下

父母の孝養……………四十一頁

親子の愛別……………五十五頁

夫婦の相思……………五十九頁

目錄終

日蓮聖人天來の聲

正編 上

東海の好瑞

四條金吾殿
御返事

◎佛をば世雄と號し 王をば自在と名く、中にも天竺を
は月氏と云ひ、我國をば日本と申す、一閻浮提八萬の
國の中に大なる國は天竺、小き國は日本なり、名の出
たきは印度第二、扶桑第一なり、佛法は月の國に始て日
の國に留るべし、月は西より出で、東に向ひ、日は東
より西へ行くこと天然の理り、磁石と鐵と雷と芭蕉と
の如し、誰か此理を破らん
(千六百二十八)

東海的好瑞

顯佛未來記

大集經の中に五箇の五百歳と云ふことあり一には解脱堅固二には禪定堅固三には讀誦多聞堅固四には多造塔寺堅固五には闘争言訴白法隱没なり各五百年を一期とす故に二千五百年

◎月は西より出で、東を照し、日は東より出で、西を照す、佛法も亦た此の如し、正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く○佛記に順じて之を勘ふるに既に後五百歳の始に當れり、佛法必ず東土の日本より出づべきなり (九百七十六)

◎而るに日蓮は閻浮提日本國に申す國の者なり、此國は佛の世に出でさせ玉ひし國よりは東に當つて二十萬餘里の外遙なる海中の小島なり、而るに佛御入滅ありては既に二千二百二十七年なり、月氏(印度)漢土(那)の人の此國の人々を見候へば、此國の人の伊豆の大島奥州の東の夷なんごを見るやうにこそ候らめ、而るに日蓮は

目を後五百歳とす 妙法尼御前抄

日本國の安房の國に申す國に生れて候ひしが、民の家より出で、頭を剃り袈裟をきたり (千七百六十九)

◎月はいみじけれども秋にあらざれば光を惜む、花は目出たけれども春にあらざれば咲かず一切時によることなり、されば正像二千年の間は題目の流布の時に當らざる歟、又佛教を弘むるは佛の御使なり、隨て佛の弟子の讓を得ること各別なり、正法千年に出でし論師、像法千年に出づる人師等は、多くは小乗、權大乘、法華經の或は迹門(前十四品の意)或は枝葉(一品を取て隨宜に修す)を讓られし人々なり、いまだ本門の肝心たる題目を讓られし上行菩薩世に出現し給はず、此人末法に出現して妙法蓮華經の

五字を一闍浮提の中、國ごとに人ごとに弘むべし、例せば當時日本國に彌陀の名號の流布しつるが如くなるべき歟。◎然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず、持戒破戒にも闕て無戒の僧、有智無智にもはづれたる牛羊の如くなるものなり、何にしてか申しそめけん、上行菩薩の出現して弘めさせ給ふべき妙法蓮華經の五字を先立てねこの様に心にもあらず南無妙法蓮華經ご申し初て候ひし程に唱ふるなり、所詮よきことにや候らん又悪きことにや侍るらん我も志らず人もわきまへがたき歟

(千四百二十七)

寂日房抄

◎日蓮は日本第一の法華經の行者なり。すでに勸持品の

二十行の偈は此書之初に引けり修行とは身に實行することなり宿習とは前世よりの約束と云が如し

聖人御難抄

一闍浮提とは世界中と云が如し

二十行の偈の文は日本國の中には日蓮一人よめり。八十萬億那由佗の菩薩は口には宣たれども、修行ある人一人もなし。不思議の日蓮をうみ出せし父母は、日本國の一切衆生の中には大果報の人なり。父母ご爲り其子ご爲るも必ず宿習なり。若日蓮が法華經釋迦如來の御使ならば、父母あに其故なからん哉(千八百七十三)

◎日蓮末法に出でずば、佛は大妄語の人、多寶十方の諸佛は大妄語の證明なり。佛滅後二千二百二十餘年が間一闍浮提の内に佛の御言を助たる人、但日蓮一人なり。○各々師子王の心を取り出して、いかに人おごす威ごもをぶ怖るご勿れ。獅子は百獸にをちず、獅子の子

開目抄

又かくのごとし。彼等は野干の吼るなり、日蓮が一門は獅子の吼るなり
(千八百七十六)

◎一滯をなめて大海の志は(潮)を知り。一華を見て春を推せよ。万里を渡りて宋に入らずとも、三箇年を経て靈山にいたらずとも、龍樹のごく龍宮に入らずとも、無着菩薩のごく彌勒菩薩にあわずとも、二處三會に値ずとも、一代の勝劣はこれあれるなるべし。蛇は七日の内の洪水を知る、龍の眷屬なる故。鳥は年中の吉凶を知る、過去に陰陽師なりし故。鳥は飛ぶ徳人に過れたり。日蓮は諸經の勝劣を知ること華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の弘法にすぐれたり、天

台傳教の跡を志のぶ故なり、彼人々は天台傳教に歸せさせ給はずば謗法の失まぬがれさせ給ふべしや。當世日本國に第一に富るもの日蓮一人なるべし。命は法華經にたてまつり、名をば後代に留むべし。大海の主となれば、諸河神皆志たがう。須彌山王に諸山神志たがわざるべしや
(八百〇三)

撰時抄
五濁とは煩惱濁、衆生濁見濁命濁切濁なり
(方便品にあり)

◎傳教大師の云く、世を語れば則ち像の終り末の始め、地を尋れば唐の東羯の西、人を原れば則ち五濁の生鬪争の時なり。經に云く猶多怨嫉況滅度後此言と良に所以あるなり云云。夫れ釋尊の出世は住劫第九の減、人壽百歳の時なり。百歳と十歳との中間、在世五

十年に滅後二千年に一萬年となり。其中間に法華經流布の時二度あるべし。所謂在世の八年に滅後には末法の始め五百年なり。而るに天台妙樂傳教等は進では在世法華經の時にももれさせ給ひぬ。退ては滅後末法の時にも生れさせ給はず。中間なることをなげかせ給ひて末法の始を戀ひさせ給ふ御筆なり。例せば阿私陀仙人が悉達太子の生れさせ玉ひしを見て悲で云く。現生には九十に餘れり。太子の成道を見るべからず。後生には無色界に生れて五十年の説法の坐にもつらなるべからず。正像末にも生るべからず。なげきあがごころ道心あらん人々は此を見きつて悦ばせ給へ。正像二千

年の大王よりも後世ををまん人々は末法の今の民にてこそあるべけれ。此を信ぜざらんや。彼天台の坐主よりも南無妙法蓮華經を唱ふる癡人となるべし。

千百九十五

撰時抄

◎日出でぬれば星かくる。賢王來れば愚王亡ぶ。實經流布せば權經は止まり。智人南無妙法蓮華經を唱へば愚人の此に隨はんご影ご身ご聲ご響ごのごくくならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なるご敢て疑ひなし。此を以て推せよ。漢土月支にも一闍浮提の内にも肩をならぶるものはあるべからず。

千二百三十六

◎天竺國をば月氏國と申す佛の出現し玉ふべき名なり。

諫曉八幡抄

法華經七卷
不輕品に未
法の修行の
姿を説くな
り
佐渡勘氣抄

扶桑國をば日本國と申す。豈に聖人出で玉はざらん哉。月つきは西より東へ向むかへり月氏げつしの佛法ぶつぽふの東へ流ながるべき相さうなり。日は東より西へ入る。日本の佛法ぶつぽふの月氏げつしへかへるべき瑞相ずいさうなり。月は光り明ならず。在世は八年なり。日は光明くわうみやう月に勝まされたり。五々百歳の長き闇を照すべき瑞相ずいさうなり。佛ほとけは法華經ほふけ誦法ほふぽふの者ものを治ちし玉たまはず。在世ざいせいにはなき故ゆゑに。末法まつぽふには一乗いちじやうの強敵きやうてき充滿じゆうまんすべし。不輕菩薩ぶけいぼさつの利益りやく是こゝなり。各各おの／＼我弟子わがでし等らはげませ玉たまへはげませ玉たまへ。

二千四十

◎日蓮にぢん今生こんじやうには貧窮下賤ひんぎやうげせんの者ものと生うまれ。旃陀羅せんたらか（屠者とら即すなはち漁父りふ事こと）が家いへより出でたり。心こゝろこそすこし法華經ほふけを信まじたる様ようなれども

身みは人身じんじんにて畜身ちくじんなり。魚鳥いさどりを混丸まじりして赤白せきぱく二滯にぢさせり。其中そのうちに識神しきじんを宿すくす。濁水じやくすいに月つきのうつれるが如ごとし。糞囊ふんなんに金かねをつゝめるなるべし。心こゝろは法華經ほふけを信まずる故ゆゑに梵天ぼんてん帝釋ていじやくをも猶恐なほおそむと思おもはず。身みは畜生ちくじやうの身みなり。色心しきじん不相應ふさうおうの故ゆゑに愚者ぐしやのあなづる道理だうりなり。心こゝろも亦またた身みに對たいすればこそ月つきと金かねにも喩たとふれ。 八百三十

長狹ながせきの浦うらの夕日ゆふひかけ

ひくや心こゝろの哀別あひべつも

兒こゝろにして今いまは兒こゝろにあらぬ

一切いっせき衆生じゆうじやうの救すくの主ぬし

けふしも弘通くわうつうの首途かふとする

その勇ゆうのうしろ影かげ

光明燦と輝きて

老の涙の玉と玉

散るはなげきの露ならず

我兒無事なれ法の爲め

吾師安かれ國のため

(妙宗八ノ一〇六)

安國爲忠、爲孝、矣爲身、不述之、爲君、爲佛、爲神、爲一切衆生、所命令言上、也恐々謹言 (一昨日書)

○月の國とは天竺なり、日の國とは日本なり、吾國名に對して天竺の月氏と稱し支那の震旦と號する、おのづから日『月』星の三光にあればとて、これを以て佛法の三國に於る淺深の表示とするは、本化妙宗の特有教判にして洵に味ある談道なりかし、天竺は思慮の國なり、支那は禮儀の國なり、日本は合せて之を醇化すべき國なり、天竺の中心は釋迦佛なり、支那の中心は天台大師日本の中心は日蓮

上人なり、

佛法は邦土の教にあらずして人類の教なり、もとより其天竺たる支那たる日本たるを西洋たるを問はず、人類開明の順序と便利とを追てその適當の地に於て繁殖すべき運命を有す、師子尊者の斷頭と共に佛法の縁は一ます天竺を去りたるものなり、されど白馬一たび漢に入て第二の天竺國は支那國民の人心に築き出されぬ、佛教の流化の盛なること、はるかにその故國に勝れり○天竺國は支那を介して三たび吾日本の思想界に建國したり、山河を以て言ふ處の國は姑く之を置き、月の國は亡びても佛法は昌ふ、そは日の國に移殖去たるが故なり、日本は佛法の先天國なり、日本は先天の佛法國なり、天竺の釋尊は日本天祖の垂迹にして摩奴より舊く、伽耶よりも久しき文明を有せる王家によりて經營せられたる邦土なり、佛滅後に於て佛法の日本に移りたるはその本土に歸

りたるなり、

月氏を苗代とし、震旦を試殖地とし、根莖固く移殖せる日本の佛法は、風土地味の適合によりて始て華咲き果成ることを得たり、經に云く『是好き良薬を今留て此に在く』と佛法の華とは法華經の本迹の法門なり、佛法の果とは本門題目妙法五字の要法なり、天竺も支那も由來日本の爲に存せる邦土なり、故きを温て新きを知るときは西洋の文化も亦かくの如くなるべし、吸收醇化の極、其齊整調熟せる大文明は却て宇内を契すべきなり（妙宗八の三四、秘抄）此れ聖日蓮の我國に於る自覺なり此自覺に依て始て日本國の眞價と法華經の体とを得たるなり、其心中に思想を練て心錬工夫を以て悟とするものは空論なり、其理想の國家人世に顯れて始て心あり身ありて事實に世を救ひ人を導く是れ當家の事行即成の大事なり、日本國の佛法必ず此國の精華と共に花咲き果なるべきなり、

○事を驛めたる上よりこれを祖と云ふは必しも妨なし、但一宗一門一團の祖として満足するを誤想とは云ふなり、本化大聖は宗團の祖にあらず、○すでに大法と終始して自己によらざるが故なり、況んや末葉と云ふべけんや、何もの道統をも受けざればなり、釋迦の弟子と云ふも尙是れ一往なり、その實は本佛の應現なればなり、何況や天台龍樹をや『誰か一天に眼を合せ四海に肩をならぶべき』とは是なり、（妙宗八の一、五）

○謂れなく人にはごらんことを欲して、驕傲自ら高くするは凡情なり、道に害あるは言ふまでもなく、遂には己れをも損するに至るべし、斯くの如きものは謙下抑損の道を誨へて其の迷妄を救はんとする、古來聖賢の教、内外其の揆を一にせり、故に聖人まつ自ら謙して後、人を導く、孔子に「郷黨の箴」あり佛陀に「恭敬」の教ある是なり。

○道を票榜して天下萬衆の上に臨むや、その身すでに自己の私にあらず、その一嘖一笑の末までも都て是れ道の發作として、天下萬世の準則となる、進退出没おのれに由らずして、悉く道に由る舉ぐべけんば之を舉げ、謙すべくんば謙す、孔子の『天、徳をわれになせり』も、佛陀の『われは是れ如來なり能く及ぶものなし』も、自ら舉げて道の爲め及び人の爲めにす、庸凡の徒儻若し之を以て『聖人亦慢す』といはば、是れ日の熱ありて物を焼くの故を以て其の光をも難せんとするが如し、至聖自ら高擧するは、是れその盛徳を露骨にしたる場合なり。

○『日蓮は日本國の柱なり』、『日蓮は當帝の父母なり』、『日蓮は一切衆生の父母主君師匠なり』、『日蓮去る時は國亡ぶべし』、『教主釋尊よりも大事の日蓮』等の言を聞て失意のものは慢なりといふ、いづくんぞ知らん、此言は驕慢自高の心より發せずして、不樂多説の

大沈黙者、篤恭淳厚の大謙遜者が、己れを没して道に入りたる、最高道義の究竟發作として、その恭黙の口より迸發したる「道の聲」なるを、聞て怪むものは先づみづからの道に遠ざかりたるを知らざるが故なり、凡そ物を探ぐる時、高く叫びてその所在を知らしむ、無道の世に在りて、唯一の正道を票榜するもの、必らず先づ高く彰はして歸嚮を知らしめざるべからず。

○己れを没して聖教に遵はんとするものは正直にして柔和なるを要す、聖進めと命すれば則ち進み、退けと誨ふれば則ち退く、進退一に道に由て己れに由らず、『一切衆生中亦爲第一』たれど教訓せらるれば、必ず自ら第一たらんと願し且つ念すべし、これを質直といひ柔順といふ、經典の教に據らずして、自己の才覺を加ふるものは却て是れ慢の甚しきもの也、本經には極力「上行」の出現洪化を讃す、自ら票致するは即ち、聖祖の如説修行なり。(妙宗第七ノ九)

妙法尼返事

怨嫉の狂態

◎是は一向に法華經の敵、王一人のみならず、一國の智人並に萬民等の心より起れる大惡心なり、譬へば女人物をねためば胸の内に大火もゆる故に、身變じて赤く毛さかさまにたち、五体ふるい、面に炎あがり、面は朱をさしたるがごとし、眼まろ(圓)になりて猫の鼠を見るがごとし、手わななき柏の葉を風の吹に似たりかたわらの人を見れば大鬼神にこそならず、日本國の國主、諸僧比丘比丘尼等も又如是たのむところの彌陀念佛をば日蓮が無間地獄の業云を聞き、眞言は亡國の法云を聞き、持齊は天魔の所以云を聞て

念珠をくりながら齒をくいちがへ、鈴を振るに頸をこり(躍)居り、戒を持て惡心を懷く、極樂寺の生佛の良觀聖人は折紙をささげて上へ訴へ、建長寺の道隆聖人は輿にのりて奉行人に跪く、諸の五百戒の尼御前等は帛(賂賄)をつかいて傳奏を爲す、是偏へに法華經を讀て讀まず聞て聞かず、善導、法然、が千中無一、弘法、慈覺、達磨、等の皆是戲論(法華を輕蔑せし言)教外別傳のあまき酒に酔はせ給て酒狂ひにておわするなり、法華最第一の經文を見ながら、大日經は法華經に勝れたり、禪宗は最上の法也、律宗こそ貴けれ、念佛こそ我等が分に叶ひたりと申は、酒に酔る人にあらずや、星を見て月に

勝れたり。石を見て金にまされり。東を見て西に云ひ
 天を地に申す物狂ひを本として。月と金は星と石とに
 は勝れたり。東は東、天は天なんご有のまゝに申す者
 をあだませ給はゞ。勢の多きに可付歟。只物狂の多く
 集れる也。

(千七百八十五)

報恩抄

◎古は二百五十戒を持って、忍辱なること富樓那の如くな
 る智者も、日蓮に値ぬれば悪口を吐く。正直にして魏
 徴、忠仁公のごこくなる賢者等も日蓮を見ては理を枉
 て非をおこなふ。況や世間の常の人々は犬の猿を見た
 るが如く、獵師の鹿をこめたるに似たり。日本國の中
 に、一人にして故こそあるらめと云ふ人もなし。

國は一王世は一佛

經は唯これ一乘の

法華は諸經の王にして

最第一と詔らせしを

第三戲論と眞言師

捨てよ閉ぢよと念佛者

暗禪の徒は反古と罵り

斗藪の族は粕と毀る

これ人天の悪知識

三衣に包ひ魔の叫び

(妙宗八ノ四〇三六)

伊豆の荒波

彌三郎抄

◎日蓮去る五月十二日。流罪の時。その津につきて候しに。いまだ名をもききをよびまいらせず候處。船より上り苦み候きころに慙にあたらせ給候し。こいかなる宿習なるらん。過去に法華經の行者にみわたらせ給へるが。今末法に船守の彌三郎と生れかわりて日蓮をあわれみ給歟。縦ひ男はさもあるべきに、女房の身こして食をあたへ洗足てうづ(手水)其外さも事態なる事日蓮はあらず不思議とも申ばかりなし。殊に三十日あまりありて。内心に法華經を信じ。日蓮を供養し給事いかなる事のよしなるや。かゝる地頭萬民。日蓮をに

南條抄

くみ(憎)ねたむ(嫉)こ、鎌倉よりも過たり。見るものは目をひき。聞人はあだ(怨)む。殊に五月のころなれば米もごぼしかるらん日蓮を内々にてはぐく(育)み給し事は日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云所に生れかわり給歟。

(四百十二)

◎去年の五月十二日より今年正月十六日にいたるまで二百四十余日の程は。晝夜十二時に法華經を修行し奉るこ存じ候。其故は法華經の故にかゝる身こ成て候へば行住堅臥に法華經を讀み行するにてこそ候へ。人間に生を受けて是程の悦は何事か候べき。凡夫の習ひ我こはげみて菩提心(ぼだいしん)を起して後生(ごしやう)を願(ねが)ひへごも。自ら思ひ

出^い十二時^{じふに}の間^{あひだ}に一時^{いち}二時^にこそははけみ候^{まち}へ。是^{こゝ}は思^{おも}ひ出^いさぬにも。御^ご經^{ぎやう}を讀^よみ讀^よまざるにも。法^{ほふ}華^け經^{ぎやう}を行^いするにて候^{まち}歟。

(四百二十)

岩根かむ五百重の濤のとろにも

ありとむかしの驚かれぬる 義世

さすらへの我は罪なき今宵より

ごころのまゝに磯の月見む 義世

巖の頭聲の中舟の感

南條兵衛七郎殿御書

松間の電影

◎今年も十一月十一日安房國東條の松原に申大路にして申酉(四時)の時數百人の念佛等にまちかけられ候て。日蓮は唯一人、十人ばかり、ものの要にあふ(會)ものは、わづかに三四人なり。いるや(射矢)はふるあめ(降雨)の如し。うつ(打)たち(刀)ほいなづま(電)の如し。弟子一人は當座にうちごられ。二人は大事のてにて候。自身もさられ打れ結句にて候し程に。いかが候けんうち(打)もら(漏)されていままていき(生)てはんべり。いよく法華經こそ信心まさり候へ。
(五百二十四)

聖人御難事

◎各々師子王の心を取り出して、いかに人をごすこも

をづる事なかれ。師子王は百獸にをぢず。師子の子又かくのごとし。彼等は野干のほうる(吼)なり。日蓮が一門は師子の吼るなり
(千八百七十五)

妙の響や法の海

左近が法名日玉聖人

捨身の誓くもりなき

關もはれ行く夜長川

夜風にそよぐ濱荻の

松にかたみさちぎりたる

法の操の深みどり

四の緒琴にひきさうつし

蓮華が淵の波音も

いづれ劣らぬ壯烈は

鏡忍阿闍梨日曉上人

散るむら雲の絶間には

招くまに〜いざさらば

菩提の松や小松原

染めて血潮の墓じるし

千代のしらべと傳へけり

(妙宗第九ノ十六號ノ十二)

種々振舞抄

沙上の流血

◎由井の濱にうちいで御靈の前に到て云く。あばし(暫)殿原。是に告くべき人ありこて。中務三郎左衛門の尉ご申者の許へ熊王ご申童子を遣したりしかば。急ぎ出でぬ。今夜頸切られにまかるなり。此數年が間願ひし事是なり。此娑婆世界にして。雉ごなりし時は鷹につかまれ。鼠ごなりし時は。猫に喰われ。或は妻子の敵に身を捨、所領に命を失ひし事。大地微塵よりも多し法華經の御爲には一度も失ふ事なし。されば日蓮貧道の身、生れて父母の孝養心にとらず。國恩を報ずる力なし。今度頸を法華經に奉て。其功德を父母に回向し

其餘をば弟子檀那等にはふ(配分)くべしと申せし事是なりと申せしかば。左衛門尉兄弟四人馬の口に取付き腰越龍口に付ぬ。こゝにてぞあらんずらんと思し處に案の如く兵ごも打まはりてありしかば。左衛門尉申様只今なりと泣く。日蓮申様。不覺の殿原かな。是程の悦をば笑へかし。何に約束をば違へらるゝぞと申せし時。江の島の方より月の如くなる光物。鞠の様に辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る。十二日の夜のあけくれに、人の面も見えざりしが。物の光り月夜の様にて人の面も皆見ゆ。太刀取。目眩み倒れ臥し。兵共おちおそれて一町ばかり馳りのき。或は馬より下て畏り

或は馬の上にてうづくまる者もあり。日蓮申様。何に殿原かゝる大禍ある召人をば。遠くのくぞ近く打寄れや打寄やと高々と喚はれども。急ぎ寄る人もなし。さて夜も明しかば。いかに頸切るべくば。急ぎ切るべし夜明なば見苦しかりなると。すゝめしかども。兎角の返事もなし。

(千三百九十三)

富木殿抄

◎上の責させ給にこそ。法華經を信とたる色もあらわれ候へ。月はかけて(虧)満ち。潮はひて満つること疑なし。此も罰あり。必ず徳あるべし。

(六百八十八)

四條金吾抄

◎日蓮過去に妻子所領眷屬等の故に身命を捨し所いくぞはくぞありけん。或は山にすて海にすて或は河或は磯

等路のほごりか。然れども法華經の故。題目の難にあ
らざれば捨し身も蒙むる難等も成佛の爲ならず。成佛
のためならざれば捨し海河も佛土にあらざるか。今度
法華經の行者せきやうしやこして流罪死罪るさいしさいに及ぶ。流罪は伊東死罪
は龍口たつのくち。相州龍口こそ日蓮が命を捨てたる處なれば佛
土に劣るべしや。其故は法華經の故なるが故なり經に
云く十方佛土中唯有一乘法ちうぼうぶつ どのみかにたいいちじようのほごのみありしことこ此意なるべき歟。
(六百九十)

一心ニ欲見レ佛ヲ不自惜ニ身命ヲ (壽量品)

我不愛身命但惜無上道 (勸持品)

常啼東ニ請シ善財ヲ南ニ求メ (止觀一)

藥王燒キ臂ヲ普明ヲ勿レ頭ヲ

日蓮と云ひしものは、去る文永八年九月十二日、
子丑の時に頸はねられぬ此は魂魄佐渡に在り

(開目抄)

配所の積雪

抄 佐渡御勘氣

◎九月十二日御勘氣を蒙て。今年十月十日佐渡の國へま
かり候也。本より學文まなぶ候ことは佛敎をきわめて佛に
爲り、恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は必
ず身命をすつる程のことありてこそ佛にはなり候らめ
とおしはからる。既に經文の如く惡口罵詈ののしり刀杖瓦石數
々見擯出と説れてかゝるめに値ひ候こそ法華經を讀む
にて候らめといよく信心もおこり後生もたのもしく

法蓮抄

候

(七百一)

◎然に今日蓮は外見の如きは日本第一の癖人なり。或朝六十六箇國二の島の百千萬億の四衆。上下萬人に怨ま^らる。佛法日本國に渡^つて七百餘年に。いまだ是程に法華經の故に諸人に悪^まれたるものなし。漢土月氏にもあるべしごもおぼ^ゑず。されご一閻浮提第一の癖人ぞかし。かゝるものなれば、上は一朝の威に恐れ。下は萬民の嘲を顧みて。親類も訪はず。外の人^は申に及ばず。出世の恩のみにあらず。世間の恩を蒙^むる人も諸人の眼を恐れて。口を塞^がんごして。心に思はされごも諂^る由をなす。數度事に値^ひ。兩度御勘氣を蒙^むりしか

ば。我身の失に當^るのみにあらず。行通人々の中にも。或は御勘氣。或は所領をめされ。或は御内を出され。或は父母兄弟に捨^らる。されば付し人も捨^てはてぬ。今又付人もなし。殊に今度の御勘氣には死罪に及^しが如何が思はれけん。佐渡の國に遣^されしかば。彼國に趣^くものは。死は多く生は希^なり。からくして行付たりしかば。殺害謀叛の者よりも猶^を重^く思はれたり。鎌倉を出てしより。日々強敵重なるが如く。有^ご在^る人は念佛の持者なり。野に行き山に行くも。そ(祖)はひ(坦)らの艸木の風に隨^ふてそよめく聲も。敵の我を責^むる歎^み覺^へ。漸^く國に著^きて北國の習ひなれば冬

は殊に風はげしく雪深し。衣薄く食乏し。根を移されし橋の自然と朽と成けるも身の上につみしられたり。栖には尾花刈萱生滋れる野中の五三味原に朽破たる草堂の上は雨漏り、壁は風もたまらぬ傍りなり。晝夜耳に聞くものは。枕にさゆる風の音。朝暮に眼に遮るものは遠近の路を埋むる雪霰なり。現身に餓鬼道を経八寒地獄に落ぬ。彼蘇武か拾九年の間胡國に留められ雪を食こし。李陵が巖窟に入て六年蓑を著て過しけんも我身の上なりき。

(千百六十七)

種々振舞抄

◎十一月一日に六郎左衛門が家の後みの家より塚原と申山野の中に。落陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる所に

一間四面なる堂の佛もなし。上は板間あわず。四壁あばらに雪ふりつもりて消ゆることなし。かゝる所に敷皮うちしき。蓑うちきて夜を明し日を暮らす。夜は雪霰雷電ひまなし。晝は日の光りもさゝせ玉はず。心細かるべき住居なり。

(千三百九十八)

此心此境妙ニ難シ思ヒ

寂寞山堂三昧時

陶三寫性靈無一字

嶺雲溪月是真詩

(元政)

妙法尼抄

延嶺の眞月

◎今又此山に五箇年あり。北は身延山と申て天に峙立ち
 南は鷹取と申て鷄足山の如し。西は七面と申て鐵門に
 似たり。東は天子がだけと申て富士の御山に太子たり
 四の山は屏風の如し。北に大河あり早河と名く。早き
 ここ箭を射るが如し。南に河あり波木井河と名く。大
 石を木の葉の如く流す。東には富士川北より南へ流れ
 たり。千の鉾をつくが如し。内に瀧あり身延の瀧と申
 す。白布を天より引くが如し。此内に狭小の地あり。
 日蓮が庵室なり。深山なれば晝も日を見たてまつらず
 夜も月を詠むるこころなし。峯には巴峽の猿喧す。谷

には波の下る音鼓を打つがこころし。地にはしかざれご
 も大石多く。山には瓦礫より外には物もなし。國主は
 惡み玉ふ。萬民は訪らはず。冬は雪に道を塞ぎ夏は艸
 生ひしげり。鹿の遠音うらめしく。蟬の鳴聲かまびす
 し。訪人なければ命もつぎがたし。はだへをかくす衣
 も候はざりつるに。かゝる衣をおくらせ給へるこそい
 かにこも申すばかりなく候へ。見し人聞きし人だにも
 あわれこも申さず。年比なれし弟子つかへし下人だに
 も皆失せこぶらはざるに。聞きもせず見もせぬ人の御
 志し哀れなり。偏へに是別れし我父母の生れかわらせ
 給ひけるか。十羅刹の人の身に入りかわりて思ひよら

せ玉ふ歎

(千七百八十)

波木井殿書

◎時に五十三(釋)同五月二十日かまくらを立て甲斐の國に分け入る。路次のいふせき(愛患)峯に登れば日月をいたぐくが如く。谷に下れば穴に入るが如し。河猛くして船渡らず。大石流れて箭をつくが如し。道狭くして繩の如く草木あがりて路見へず。かゝる所へ尋ね入ること淺からざる宿習なり。かゝる道なれども釋迦佛は手を引き帝釋は馬を爲り梵王は身に立ちそひ(添)日月は眼に入りかわらせ給ふ故にや。同十七日甲斐の國波木井の郷へ着きぬ。

(二千百十二)

身延山御書

◎誠(まこと)に身延山之栖(すま)は、ちはやふる(千早振)神もめぐみを

垂れ、天下りましますらむ。心なきあづの男あづの女までも心を留めぬべし。哀を催ふす秋の暮には艸の庵に露深く。檐にすたく(集)さゝかに(蜘蛛)の糸玉を連き。峰の紅葉いつしか色深ふして。たへぐ(續断)に傳ふ懸樋の水に影をうつせば。名にし負ふ龍田の河の水上もかくやと疑われぬ。又後ろには峨々たる深山をびるて、稍に一乗の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く。前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴て、法性の空に雲もなし。かゝる砌(みせ)なれば庵の内には、晝は終日一乗妙典の御法を論談し。夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳聞く釋尊の住み給ひけん鶯

峰山を我朝此砌に移し置ぬ。霧立嵐はげしき折々も、
 山に入て薪をこり。露深き草を分て深谷に下りて芹を
 つみ(摘)山河の流れもはや巖瀬に菜をすき。袂志
 ほれて干しわふる思は、昔の人丸か詠じける、和歌の
 浦に、もしほ垂れつゝ世を渡る海士も、かくやと思ひ
 やる。つくづく、浮身の有様を案ずるに、佛の法を求
 め給ひしに異ならず

(千二百九十七)

同前

◎されば法華經には四十余年が程被簡女人も佛に成り。
 五逆闍提ご被云提婆も佛に成りけり。然れば末代濁世
 の謗法闍提五逆たる。僧も俗も尼も女も此經にて成佛
 事無疑。然者法華經第七云於我滅度後應受持此經是

人於佛道決定無有疑云云。此文こそよにく、憑敷候へ。
 此等の様を思ひつゞけて。觀念の床の上に夢を結べば
 妻戀鹿の音に目をさまし。我身の内に三諦即一心三
 觀の月曇り無く澄みけるを。無明深重の雲引覆ひつゝ。
 自昔今に至るまで。生死の九界に輪ること。此砌にし
 られつゝ自らかくぞ思ひ連ぬる

立わたる(渡)身のうき(憂)雲も晴れぬべし

たゑぬ(絶)御のりの(法)鷺の山かぜ

(千三百六十)

興起御書

◎去文永十一年六月十七日に此の山の中に木を打ちきり
 て、かりそめに庵室を造りて候しが。やうやく四年が

ほご、柱ら朽ち、かきかへ(墻壁)をち(落)候へご、なおす
 ことなくて。夜火をさぼさねごも月の光りにて、聖教を
 讀みまいらせ。われご御經を卷きまいらせ候はねごも
 風おのづから吹返しまいらせ候ひしが。今年は十二の
 柱、四方に頭を投げ。四方の壁は一所に倒れぬ。有待
 (身體)たもちがたければ。月は住め雨は止まれごはげみ
 候つるほごに。人夫なくして學生ごもを責め。食なく
 して雪を以て命を助けて候ごころに。さきの上野殿よ
 り芋二駄、これ一駄は玉にも過ぎたり(千六百五十七)
 ◎この閏十月三十日雪すこしふりて候しがやがてきへ候
 ひぬ。この月の十一日たつの時より十四日まで大雪ふ

兵衛志書

り候しに兩三日へだて、すこし雨ふりて雪かたくなる
 こと金剛の如し。いまにきゆることなし。ひるもよる
 もさむくつめたきこと法に過て候。酒はこをりて石の
 ことし。油は金に似たり。鍋釜は小し水あればこをり
 てわれ。寒いよくかさなり候へば。さもの薄く食ご
 ぼしくしてさしいづるものなし。坊は半作にて風雪た
 まらず。しきものはなし。木はさしいづるものなけれ
 ば火もたかず。ふるきあかつきなんごして候こそで一
 つなんごきたる(衣)ものは其身の色、紅蓮大紅蓮(寒地獄
 の事也)の如し。聲は婆々大婆々(寒地獄の苦聲)地獄にことならず。手足
 かんじて切れさけ人死するごごかぎりなし。俗のひげ

筒御器書

(髻)を見れば瓔珞を掛たり。僧の鼻を見れば鈴をつらぬき(貫)かけて候。
(千八百二十五)

◎爰に庵室を結び。天雨を脱れ。木の皮をはぎて四壁にし。自死の鹿の皮を衣にし。春は蕨を折て身を養ひ。秋は果を捨て命を支へ候つる程に。去年の十一月より雪降り積り。改年の正月今に絶るこごなし。庵室は七尺雪は壹丈。四壁は氷を壁にし。軒のつららは道場壯嚴の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本より人來らざる山なれば雪深して道塞がり。問人もなき處なれば。現在に入寒地獄の業を身につくのへ(償)り。生ながら佛には成らずして、寒苦鳥と申鳥にも相似た

松野殿女房御返事

り。頭は剃こごなければ鶉のこごし。衣は氷に閉ちられて、鴛鴦の羽を氷の結べるが如し。かゝる處へは古へ昵びし人も問ず。弟子等にも捨られて候つるに。御器を給て。雪を盛て飯と觀じ。水を飲て漿と思ふ。志のゆくこころ思遣らせ給へ
(千九百三十九)

◎天竺の靈山此處に來れり。唐土の天台山親りこごに見る。我身は釋迦佛にあらず。天台大師にてはなれれども。まかるまかる晝夜に法華經を讀み。朝暮に摩訶止觀を談ずれば靈山淨土にも相似たり。天台山にも異ならず。但し有待の依身なれば、著ざれば風身にしみ。食はされば命持ちがたし。燈に油をつがず。火に薪を加

へざるが如し。命いかでかつぐべきやらん。命續かた
くつくべき力絶ては。或は一日乃至五日既に法華經讀
誦の音も絶ぬべし。止觀の窓の前には草むげりなん。
かくの如く候にいかにして思ひ寄せ給ひぬらん

(千八百五十九)

南條兵衛七
郎殿御返事

◎其上此處は人倫を離れたる山中なり。東西南北を去て
里もなし。かゝるいご心細き幽窟なれども。教主釋尊
の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し。日蓮が肉團の
胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛
入定の處なり。舌の上は轉法輪(教説)の所。喉は誕生の所
口中は正覺(悟)の砌なるべし。かゝる不思議なる法華

三業とは身
の行と口の
作と意の思
となり
三徳とは法
身。般若。解
脱とて佛の
作用なり

經の行者の住處なれば。いかでか靈山淨土に劣るべき。
法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に處尊し。申は是
なり。神力品に云く若は園の中に於ても。若は林の中
に於ても。若は樹下に於ても。若は僧房に於ても。若
は白衣の舎(俗)にても。若は殿堂に在ても。若は山谷曠
野にても乃至諸佛此に於て般涅槃(成佛)し玉ふ。此砌に
望ん輩は。無始の罪障忽に消滅し。三業の惡轉じて三
徳を成ぜん

(二千六十九)

捨身弘法に骨くたき
先入主とや世の怨み

肝を剔きても濁惡世
三たび諫めて聽かれずば

巴秋の月に我れ嘯かむ』

むかしの人を偲びつゝ
ふけ行夜半の鹿の音も
病める子いかに親ごゝろ
照らさめや我國の未悉』

月漏る軒に物思ふ
ものゝあわれを知れとてや
露命のほごは筆とりて

雷電足下にとゞろきて
霧の八重垣山ふかみ
師の君いかにおはすらめ
衣るべき衣も絶なばいかに
血をしぼりても責ぐべく

天の語も聞きぬべき
身延の山に入りませし
召すべき食も今はつき
日本の柱世のいのち
供奉の面々はげますや

(妙宗八ノ三)

人磨墨磨人惟其石磨不憐

(元政)

萬丈紅泉落。 迢迢半紫氛。 奔流下雜樹。
灑落出重雲。 日照虹霓似。 天清風雨聞。
靈山多秀色。 空水共氤氳。

(宋之問)

智者が此經の謂れを説き弘るに依て法命相續するなり智者がなくば法華經を殊勝なることも埋れて果つべき也さる程に法華を學する智者を多く仕立をが功德の根本と覺ゆるなり

(日奥上人)

像門の三訓

一給待 二行法 三學問也

(日奥上人)

△祖曰く『所用に隨て諸事を辨ずるは慈悲なり』と、慈悲とは眞理の活ける作用なり、正法の功及徳は眞理に與ふるに無限の力を以てす、斯くして眞理は長へに因果の制裁を握て萬物の主となることを得、佛陀これ也。

△『所用に隨ふ』とは人民を善導する也、『諸事を辨ずる』とは國を治る也、而して慈悲の法本は正法にして、正法の發動は慈悲也、天下國家を理むるの道、ただ正法に依り慈悲を行ふの一事に在り、悲哉世は正法慈悲の名を知て其實を識らず。

△正法とは法華經也、慈悲とは法華經の使命を帯びて、永く世人の爲に眞理の木鐸となる日蓮大聖也、言ふを休めよ、日蓮以上に佛ありと、吾が所謂佛は即ち法華經也、言ふを休めよ、法華經は經卷文字也と、人勅書を禮す、彼れはその紙を禮すと言て可ならんや、一部八卷六萬九千三百八十四字、一々是れ眞佛なり、曾て天地法界を生み、亦釋迦日蓮を生みき。

正編 下

父母の孝養

新尼御前抄

光日抄

◎故郷ふるさとの事ことはるかに思おもひわすれて候そうらひつるに。今此いまこゝのあまのり（海苔）を見候て。よしなき心をもひいで、憂うれくつら（辛）し。かたうみ（片海）いちかわ（市河）こみなこ（小港）の磯いそのほごりにて昔むかし見みしあまのりなり。色形いろがたあぢわひ（味）もかわらず。なご我父母わがふぼかわらせ給たまけんこ。かたち（味）がへ（方違）なるうらめし（怨）さ。なみだおさへがたし。

（千八十九）

◎去る文永八年太歳末九月の比くらより御勤氣ごかんきを蒙かうむりて北國ほくこく之

海中佐渡の島に放されたりしかば。何もなく相州鎌倉に住ひしには生國安房の國は戀しかりしかごも。我國ながら人の意も何ごやらん昵び悪くかりしかば。常に行通ふ事もなくして過しに。御勘氣の身ご爲りて死罪ご成るべかりしが。且く國の外に放さる上は。おぼろげ(小緑)ならでは鎌倉へは歸るべからず。歸らずば又父母の墓所を見る身ごも成がたしと思ひやりしかば。今更飛立計り悔て。なごてかゝる身ごならざりし時。日にも月にも海をも渡り山をも超て父母の墓をも見。師匠の有様をも問ひをこづれざりけんご歎かはしくて。彼蘇武が胡國に入て十九年。雁の南に飛けるをうらやみ。

仲丸が日本國の朝使に。もろこし(唐土)に渡てありしが還られずして年經しかば。月の東に出たるを見て。我國御笠の山にも。此月は出させ給て。故里の人ごも只今月に向てながむらんご。心を澄してけり。此ごもかく思ひ遣りし時。我國より有人の便りに付て衣たびたりし時。彼は蘇武が雁の足。此は現に衣あり。似るべくもなきに心慰みて候き

(千四百十四)

一谷入道書

◎譬へば若き夫妻等が。夫は女を愛し女は夫をいごおしむ程に。父母の行へをいらす。父母は衣薄けれごも我は閨や熱し。父母は食はされごも我は腹に飽きぬ。是は第一の不孝なれごも彼等は失ごもいらす。況や母に

背く妻父にさかへる夫。逆重罪にあらずや。(是文は不孝の姿を寫し玉ひし妙調故此に引くことにす) (千百七十九)

◎親は十人の子をば養へごも。子は一人の母を養ふことなし。あたゝかなる夫をば懷きて臥せごも。こゝへたる母の足をあたゝむる女房はなし。(千九百八十九)

牀前看月月光。

疑是地上ノ霜。

擧頭望明月。

低頭思故郷。

(李白)

御製

國の爲めたふれし人ををしむにも

おもふは親のこゝろなりけり

親子の愛別

上野殿母御前御返事

◎抑故五郎殿かくれ給ひて既に四十九日なり。無常はつねの習なれごも此事うちきく人すら猶忍びがたし。況や母ごなり妻ごなる人をや。心の内おしはかられて候人の子には幼きもあり。長きもあり。みにくき(醜)もあり。かたわ(片輪)なる物をすら思になるべかりけるにや。おのこ(男子)ごたる上。よろづにたらい(足)なさけ(情)あり。故上野殿には壯なりし時おくれて歎き淺からざりしに。此子を懷妊せずば火にも入り水にも入らんご思しに。此子既に平安なりしかば。誰にあつらゑて身をもなくべきご思て。此に心をなくさめ(慰)て此十四五

年はずきぬ(過)。いかにいかにさすへき。二人のをのこ
 (男子)こに荷われめきたのもしく思ひ候ひつるに。今年
 九月五日、月を雲にかくされ。花を風に吹かせて。夢か
 夢ならざるか。あわれ久しき夢かななげきおり候へ
 ば。うつゝに似て既に四十九日はせ(馳)すぎ(過)ぬ。ま
 こそならばいかんがせん。さける花はちらずして。つ
 ぼめる(蕾)花のかれたる。をいたる(老)母のこゝまりて
 わかき(幼)子のさり(去)し。なさけなかりける無常かな。

(二千)

上野殿後家
尼御前書

◎あやなく(無敢)つぼめる花の風にしほみ。満る月には
 かに失たるが如くこそおぼすらめ。まことこもをばへ

候はねば。かきつくるそらもをばへ候はず又々申へし

(千九百八十)

光日上人御
返事

◎其故は子の肉は母の肉母の骨は子の骨なり松榮れば相
 悦ぶ。芝かるれば蘭泣く。無情草木すら友の喜び友の
 歎き一なり。何況や親子この契り。胎内に宿して九
 月を経て生み落し。數年まで養ひき。彼に荷われ。彼
 に吊られんと思ひしに。彼を吊ふうらめしき。後如
 何があらんと思ふ心ぐるしさいかにせんいかにせん。
 子を思ふ金鳥は火の中に入りなき。子を思ひし貧女は
 洄河に沈みき○今光日上人は子を思ふあまりに法華經
 の行者ご成り玉ふ。母子子ご共に靈山淨土へ參らせ給

ふへし

(二千六十五)

婦人^ハ依^リ倚^ス子^ト與^ト夫[。]

同居^{スレハ}貧^ナ賤^{レトモ}心亦^ク舒^フ。

夫^ハ死^ニ戰場^ニ子^ハ在^リ腹^ニ。

妾身^雖存^{トモ}如^シ畫^ノ燭[。]

(張簡)

淨雲^上天^ニ雨^ニ墜^リ地^ニ。

暫時^ノ會^合終^ニ離^ニ異[。]

我^レ今^與子^非一^身。

安^ク得^テ死^生不^レ相^棄。

(張簡)

妙法尼御返事

夫婦の相思

◎彼女^{カノメカウバウ}房^ハの御^{おん}歎^{なげ}きいかゞおしはかるにあわれなり。

たごへば藤の花の盛なるが松にかゝりて、思事もなきに松のにわかにはれ。蔦の垣にかゝれるが垣の破れたるが如くにおぼすらん。内へ入れば主じなし。やぶれたる家の柱なきが如し。容人來れども外に出で、あひしろうべき人もなし。夜の闇きにねやすさまじく。墓を見ればしるしはあれども聲もきこへず。又思ひやる死出の山。三途の河をば誰れか越へ玉ふらん。只獨り歎き玉ふらん。ごいめおきし御前たちいかに我をば獨りやる(遣)らん。さわちぎらざりしこやなげかせ給ふら

夫婦の相思

五十九

ん。かたぐ夜のふけゆくまゝに冬の嵐のをこづる。聲につけてもいよく御歎き重り候らん(千七百八十八)

持妙尼返事

◎いにしへよりいまにいたるまで、親子のわかれ、主従のわかれいづれかつらからざる。されども男女のわかれほごたごへなかりけるはなし。過去遠遠より女の身となりしが。この男娑婆最後の善知識なりけり。ちりし花おちし果もさきむすぶなごかは人の返らざるらむ。

(千八百八十)

我_レ以_テ佛眼_ヲ觀_メ

見_{ルニ}六道_ノ衆生_ヲ

貧窮_ニ無_シ福慧_ニ

入_{リテ}生_死ノ險道_ニ

相續_メ苦_不斷_ハ

如_シ犂牛_ノ愛_レ尾_ヲ

(方便品)

後 録

日蓮聖人の文章を少年學生の中に紹介して知らしめたるものは故高山博士が生前曾て吾が好める文章と題して鎌倉文學を論せられたる中に極力日蓮聖人の文章を局外に處して公平の見卓抜の議を以て稱讚し従來國文學者の眼識なきを痛罵せられたるを最とす、されば聖人の文篇を世に紹介するの序で其日蓮聖人の文章に關する節を抄録して讀者の便に供せん梶牛先生曰く

前掲の諸書に露劣るまじき或點に於ては空前絶後とも云ふべき特色を有する一大文章この時代に現はれることを百中の九十九人までは絶えて心づかざるらし日蓮上人の文章是れ也

上人の文章は加茂眞淵が嘗て徒然草にも優れりと評せるを外にして他の國學者等の注意せざる所なりき 平田は上人の遺文の一部を讀みたるに相違なけれども日蓮は傳教の蟲食なご罵倒せる外に文章に就いて一言だも言はず 近年日本文學史の著述は一二にして足らざれども三上高津兩氏の著を初めと

して上人の名をだに掲げざるが多し 坊主の書ける物なれば讀まずと云ひて國文學者の申譯は立つべきや 鎌倉時代隨一の大文學を念頭にかけざりしは國文學者因襲の僻見に本づけりとは謂ひながら不覺も甚しと謂ふべし

上人素より文章家ならず上人の文章など云ひ立てむは其の人の志に背ける業ならめど而も大文章たるの事實は黙すべくもあらず げにくく上人が文章家ならぬ事實こそまさしく其の大文章家たるの因縁ともなりしならめ

上人の文章は文字章句の排列と謂はむよりは寧ろ肝膽を活ながら白紙の上に塗りつけたる者と謂はむかた妥當なるべし 所謂文章家の眼より見れば字句整はず文辭粗厲なるのも多かるべし されど其が人の心を動かすの一段に及びては天下の文章何物か是に及ぶべき 上人の文は文に非ずして精神也 人は文字を見ずして血涙の痕を見、章句を讀まずして師子吼の響を聞く、斯くても文章の極意は達せらるる人は何が故に巧ならむとは力むるぞ げに文

はいなりけり 吾は茲に上人の文を論ずるには非ざれども序なれば思ひつける二三節を左に記して今の學生諸君に研究の技折を予ふべし 佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天臺、南岳、妙樂、傳教等だにも未だ弘め給はざる法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法華經の五字末法の初に一闍浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先がけしたり 若黨共二陣三陣ついで迦葉、阿難にも勝れ天臺傳教にも越えよかし 僅の小島の主等が威さむに恐れて閻魔王の責をば如何にすべき 佛の御使と名乗りながら臆せむことは無下の人々也

這是種々御振舞御書の首めに鎌倉殿の迫害を慮りて弟子檀那を誡めし文字也 凡そ本邦古今の文章中雄大崇嚴に於て是の一段を較ぶべき者ありや 覺束無し 其の觀念の偉大なる其の文詞の悲壯なる朗讀一下すれば肉搖き骨鳴るの思ひあらずや 僅の小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何

にすべき佛の御使と名乗りながら臆せむとは無下の人々也と結びたる如き一字一句金輪際より生ひ立てるが如し 日本文もて是れ以上の力ある文章を書かむは神業ならではあり得べしとも思はれず

高祖遺文録三十卷の中にて吾が最も愛讀するは種々御振舞御書如説修行鈔開目鈔撰時鈔佐渡御書光日抄房教行證鈔報恩鈔身延山御書成佛用心抄生死一大事血脈抄頼基陳情書波木井殿御書等也 觀心本尊抄は教相上本化妙宗の秘鑰として崇めらるゝ一大文字なれども理義深遠にして今の吾には尙ほ未だ解し難ぬるふしあるを恨みとす 其の他の御書就中消息文は上人の事蹟と對照して何れも興會盡難し

學識宏遠なる上人の物し給へる文なれば言々典據ありて無學なる吾等には會通の程頗る易からず大かたは盲人の巨象を探るにも似たらめども流石に人の心の誠は高きも卑きも變りなければにや言ひしらす首肯かるゝふしも少か

らぬぞ有り難き 中にも本誌の讀者諸君に薦むるは種々御振舞御書也 此書は龍の口の法難を中心として文應の初めより身延山の幽棲に到るまでの上人一代の事蹟を自叙せられたるものにして文解し易く歴史上の趣味さへいと饒し 吾が前號に掲げたる況後録は拙惡言ふに足らざれどもこの御書に擬して作れるなりき

法論の大文字としては開目抄を推すべし此書は喩へば大瀑布の天より落つるが如く始より終まで段落なく章節なく上下兩卷を通じて一氣にして成れり凡そ論難の文章としてかばかり雄渾を極めたるは吾が未だ曾て見ざる所也 殊に冷靜なる理論を叙説のみに非ずして紙背に燃ゆるが如き熱情を藏す 談理に托せる一大抒情文とも見るべし『詮する所は天も棄てよ』よりかの三大誓願を以て結べるあたりなき音韻錯落の間に天來の獅子吼を聞くべし 貴しとも貴し

如説修行抄は法華折伏の宣戰狀とも見るべき文にして詞急にして意迫まり節を拍て是を誦すれば骨肉飛動の感あり 無上の權威を有てる者の言は自づから是の如くなるべし 教行證抄は其弟子日進に與へて法門論難の覺悟を示せるもの如説修行抄と並びて雄壯比ひなし 『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず彼れくの經々と法華經と勝劣淺深成佛不成佛を判せむ時爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をやまして權宗の者ともをや』と云ふが如きは日本文學中に他比倫を見ざる文字ならずや 撰時抄は佛法東流の次第より未法弘通の因縁を明にして歷史上より上人の地位を説けるもの辭意暢達にして文理明晰なり 佐渡以後の御書中には上人の最も意を籠められし者の一つなるべし 報恩鈔も亦開目撰時の二書と並び稱せらるゝ大文字にして語簡にして意深し 彼の半段は舊師道善房に對する報謝の情を述べられたるものして恩愛の情盡せり 身延山御書は上人晩年

の心境を叙せられたるもの 『誠に身延山の栖は千早ふる神も恵みを垂れ天下りましますらむ』の書き落しより慈の山風の御歌に終るまでまことに神々しき大文字にして上人の偉大なる人格はおのづからその間に磅礴せり もとより長明兼好なむごの小人生觀に較ぶべくもあらず正に是れ人生觀を併せて宗教の光に醇化したるもの 波木井殿御書は上人最後の消息文にして六十年の大なる生涯を追懷するに足るもの也

上人の文を論ずるおのづから別種の用意を要す 茲にはたゞ本誌の讀者の爲に數言の注意を記せるのみ 鎌倉の時代には僧侶の手に成れる文字抄からず淨土には源空眞宗には親鸞あり彼の撰擇集此の教行信證共に見るべき文字也 梅尾の明恵か法然に對する灌邪論などもあり 其の他華嚴には凝然天台には慈鎮ありて何れも著書少からず 蓮上人の御書が是等の間にあて蘇然として他の即接を許さざるは猶ほ泰山の群峰に雄枕するが如し 人物の眞價

値のおのづから文字に現はるゝや、是の如きものあるを見るべし。

吾は歴史上の順序を追うて吾が好める文章を列擧する考なりしが、計らずも日蓮上人に引きがゝりて多くの紙數を費したれば今回は先づ是れにて筆を擱くべし。

(櫻牛全集の四卷)

と以て明治の聖代千歳の下文學上の知己を日蓮聖人の妙文に得たる我等其門下の者亦其普及に務めずして可ならん徒らに難有として文字の眼なき妄信者の囀りに任せて顧みざるは我等の罪なり願くは世の文士此短篇に依て遂に全集を讀む感興を引起すに至らんことを

飛 雷 逸 人 誌

三國無比類 後代希有文

重 録

故高山博士の日蓮研究會を起すを勸むる文に曰く

予は全國の教育家並に學生諸君に向つて茲に日蓮研究會を起すの議を提出す予を信せよ日蓮は予の知れる日本人中の最大の偉人也

予は和氣清麿、楠正成、乃至豊臣秀吉を生じたる日本を左迄大なりとは思はざれども日蓮を生じたる國土は實に生れ甲斐のある國土なることを思ふ吾人の祖先の中に日蓮の如き人物を有することは吾人が世界萬邦に誇稱すべき所也

日蓮を大ならずとする人を予は何の妨ぐる所無かるべし 然れども等しき者のみ能く等しき者を解す 予は諸君と共に彼れを解するの人たるを得ば是の上もなき幸ひならずや 諸君は須らく予に信する所あらざるべからず

既に子に信じて日蓮を偉人なりと假るさば諸君と予と共に是の偉人を研究せざるべからず 楠正成豊臣秀吉は餘りに善く知られたり 然れども誰れか吾が日蓮を言ふものぞ 言ふものは是れあり然れども其の人物は甚だ誤解せられたり 吾人は是を遺憾とす

予を以て日蓮宗の信仰を諸君に強ゆるものとなさば是れ大いなる誤也 予は信仰の大事なるを知る 諸君自らの證悟を外にして予は諸君に與ふべき何物をも有せざる也 予の勸むる所は研究の批判のみ 諸君は先づ予の志を諒とせざるべからず

今の世の腐敗は道學先生の俗惡なる學說の能く救治する所に非ざる諸君の既に知る所なるべし 願はく予に信せよ 若し日蓮の精神によりて一世を率ふること能ふべくむば當代の風氣必ず一變せむ 彼れの精神を是認すると否とは予に於て必ずしも強むすと苟も予に信するの諸君は其の道學先生の

講義を聞くの違を以て一度び彼れに接近せざるべからず

予は是の目的を以て全國處に隨つて諸君が日蓮研究會を起さむことを希望す苟も若干の同志者だにあらば其の方法の如きはおのづから成立せむ 唯斷じて決心せよ然らば事業の半ばは既に成れる也。又云く兎にも角にも諸君は日蓮研究會を起さむべからず 蟻の爲に十年を費やしたる學者もあるにあらずや 日蓮を研究するは日本歴史の寶庫を握る也 諸君の生國の榮光を覺る也 祖先を通じて諸君自らの名譽を増す也 何より貴きは是の偉人によりて吾の未だ知らざる人生の大意義の覺悟に到達すること也 即ち是れ他を研究するに非ずして自らを修養する也 若し夫れ歴史上文學上の養益に至りては素より一にして足らざるべしと雖も上に記する所に比すれば蓋し千の一なるのみ

(楞牛全集第四卷)

と博士の諄々の言誠實の勸進を故博士の逝去と共に忘れて未だ其實行の緒に就

かず、其正義のみ餘韻の千歳に響くあるのみ、願くは人世心靈界の飢渴を醫するが爲に速に此事の實にせられんこと希望に堪ざるなり、予は不日天來の聲の續篇を出すべきに依り其時に當て各地に研究會を起すの方法に就て謀るところあらん

編 者 又 誌

文 王 一 怒 天 下 康

雅 思 淵 方 文 中 王

主筆 加藤文雅師

日宗新報

(例月三回) (三日發)

壹部五拾五錢 (郵稅共)
半年八拾五錢 (郵稅共)
一年壹圓六拾五錢 (郵稅共)

東京府荏原郡池上村林昌寺 靈良閣

深川觀察師編

訓譯法華經全

△和裝帙入十卷○正價金貳圓五拾錢
△洋裝製本一卷○正價金九拾五錢
平かな付に書き下しにて婦女子の爲にも兒童の爲にも尤も便利なる訓讀本なり

發行元 加賀善事 吉田書店
大阪市心齋橋筋安土町

主筆 神代智明師

活宗教

(例月一回) (發行也)

定價壹部拾錢 (郵稅共)
東京芝區二本榎町

松光寺内正信團事務所

御斷

此書は元來頗る美麗に仕立て
讀者の求めに應じたさ考へ
に於てあつしに半途にして魔障
起りたるを予の救濟會の爲め
に東北に歸りたるを以て一に
は時日の遷延を爲り二には豫
想通りの製本を爲すの餘地な
きに到りたり依て再版の時を
期して紙數を増加し製本を美
にして以て讀者に謝せん隨て
定價を拾八錢とし普及を以て
専務といはしたり讀者諒せよ
明治卅九年五月十二日伊豆法難會の夜
浪花の客舎にて 平井學俊

田中智學居士述（菊版二百七十頁金字入美本）

●本化攝折論 全

正價金五拾錢
郵税金六錢

是れ日蓮主義の精神的解説にして本化大教の化導法詳論なり論旨の高妙なるは世の公認する所

田中智學居士述（菊版百四十頁金字入美本）

●宗門之維新 全

正價金四拾錢
郵税金四錢

是れ日蓮主義の具體的解説にして會て一たひ高山樗牛を感動歸正せしめたるものなり

●主筆は田中智學居士（創刊已來既に十ヶ年）

●記者は 山川鑿谷、中村旭鷲、保坂三寅、武田杆太、長瀧妙高、江川鏡光、桑原天統、田中芳谷、別枝星香、原樂外、田中稔渠、武田真一

●日曜に出版して、間斷なき靈養を與ふ

刊週

妙

宗

價

●壹部金	四錢
●前中金	壹圓
●前中金	貳圓

（郵五）（郵四）（郵五）
（郵四）（郵三）（郵四）

▲文章は通俗平易にして主張の義理は至て高明
▲感化の實力に於て方今天下に比類なき好雜誌

弘通元

東京市京橋區
新富町六丁目

師子王文庫事務所

明治三十九年五月十二日印刷

明治三十九年五月廿八日發行

(定價金拾八錢)

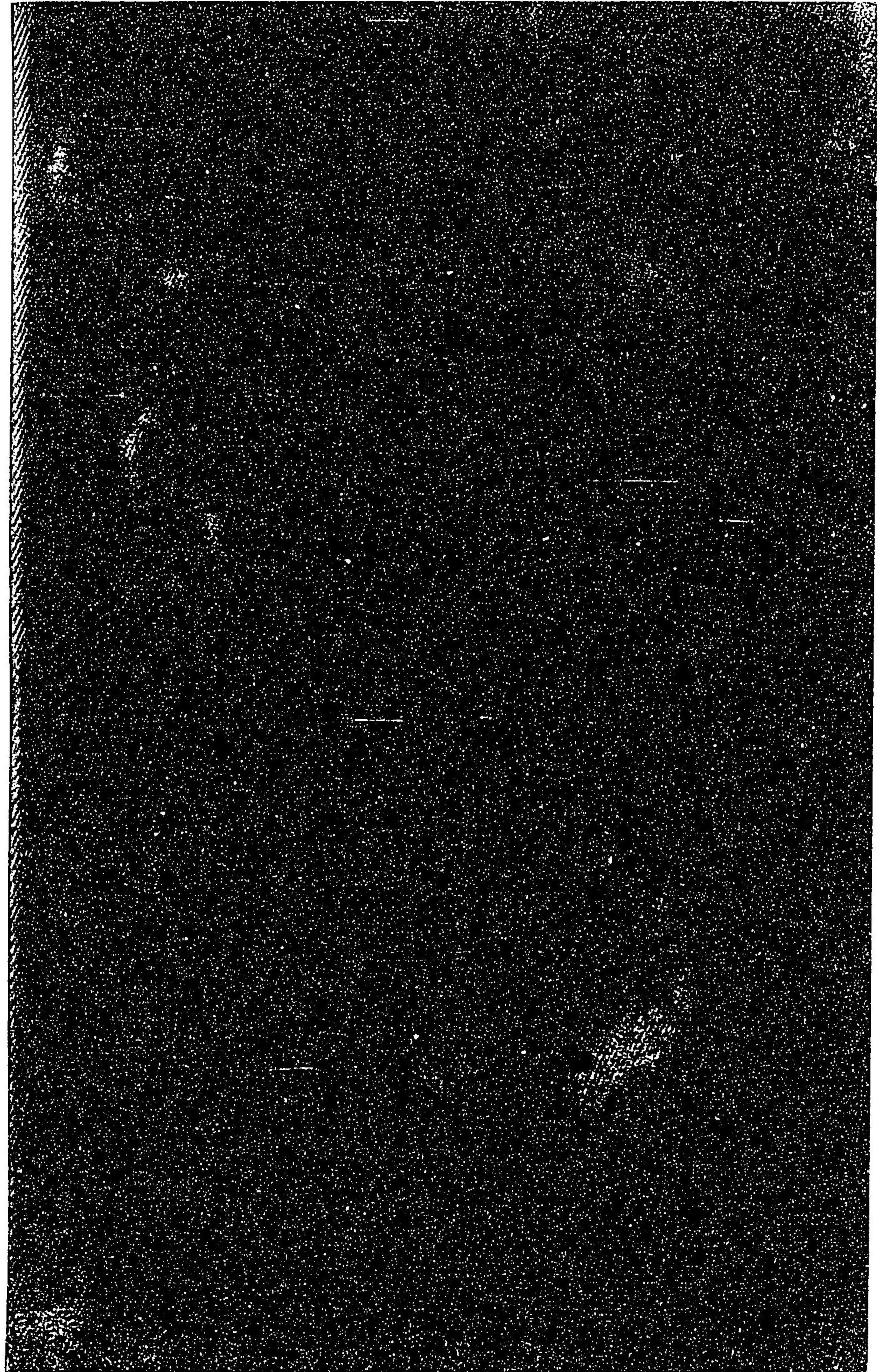
編發
輯行 人兼 平 井 學 俊

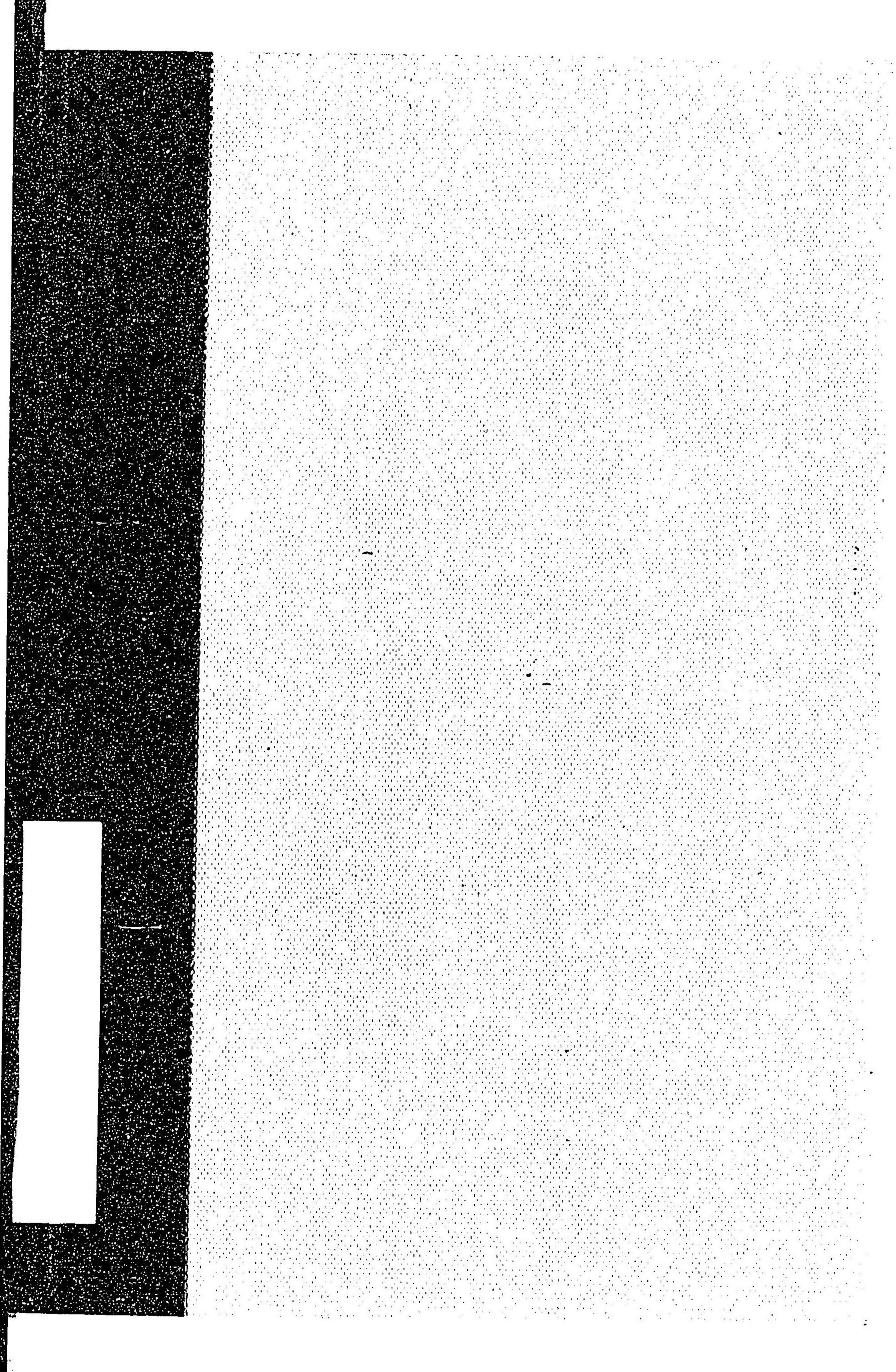
印刷人 森 本 喜 兵 衛

賣捌所 大阪市東區心齋橋安土町 加々善事 吉 田 書 店

全 東京市京橋區傳馬町 千鐘房事 須 原 屋 店







天来の声

国立国会図書館

特21

231

020062-000-3

特21-231

日蓮聖人天来の声

平井 学俊/編

M39.5

ABH-0262

